

東京地學協會沿革誌

附 出版物目錄

東京地學協會沿革誌

附 出版物目錄

## 東京地學協會設立主旨

東京地學協會ヲ企ツ未タ數旬ナラス、本日初メテ例會ヲ開クニ臨ミ、社員既ニ百名ニ近シ、是世間此舉ヲ認メテ有用ト爲スノ確證ニシテ、誠ニ慶スヘキナリ、有識者既ニ其用ヲ知ル、又之ヲ喋々スルヲ要セサルカ如シト雖モ、未タ本會ノ企圖スル所ノ目的ヲ詳述スルノ機ヲ得サリシカ故ニ、今初メテ諸君ト會同スルノ時ヲ以テ、聊カ陳述スル所アラント欲ス、諸君幸ニ之ヲ諒セヨ、抑モ地學ノ事タル、内外古今ヲ論セス、經濟政治軍防苟クモ一事ヲ爲ス皆ナ之ヲ以テ缺ク可カラサルノ具トシ、官府ナリ人民ナリ、力ヲ此道ニ盡シ、或ハ官府命シテ風土ヲ觀察セシメ、或ハ人民私シニ游歴ヲ企テ山川ヲ跋涉スル等、地學ヲ講スルノ方法一ニシテ足ラス、其事ヲ記

スルノ書冊亦タ實ニ多シ、然ルニ我國中古文物ノ稍々開クルニ當リ、外ニ  
向テハ鎖國、内ニ在テハ封建、以テ官民動作ノ區域ヲ限り、各自坐ラ其居  
處ヲ知ルノ外、他ニ求ムルノ要ナカリシカ、今ヤ封建變シテ郡縣トナリ、  
各人其才力ヲ用ユルノ區域頓ニ張大シ、苟クモ事業ヲ成ス者ハ國內各地ノ  
情況ヲ盡スヲ要シ、鎖國變シテ開國トナリ、宇內各地ニ往來交通スヘキノ  
道開キテ、更ニ其區域ヲ張大シ、宇內各地ノ情況ヲ盡サ、ルヲ得ス、是ニ  
於テ近來地學ノ需メ更ニ多キヲ加ヘ、公私此道ニ就テ汲々スルノ勢ヲ爲セ  
リ、然ルニ歎スヘキハ、或ハ内外風土ヲ觀察シ、或ハ書籍ヲ徵求スル、各  
自分立シテ其爲サント欲スル所ヲ爲スカ故ニ、其學知スルノ深淺厚薄、各  
人各個ノ才力資産ノ區域ヲ出テス、同一ノ小得ノ爲メニ數人數世ノ精神財  
貨ヲ費ヤシ、終始進ムナク、其用ヲ見ルモ亦タ甚タ狹ク、觀風察土モ徒勞  
ニ屬シ、有用ノ書冊記錄圖書及ヒ集メテ大成スヘキノ斷簡零紙ハ殊ニ死紙

トナリ、筐裏ニ埋没シ、遂ニ其用ヲ見サルニ至ルニ依テ、本會内外古今殊ニ直接間接ヲ論セス、我國ニ關繋アル各地ニ就テ、地學上有益ノ書籍新聞雜誌ヲ求メ、又古人今人ノ經歷探問ニ係ル記録ヲ採集シ地學ニ志アル人ヲシテ尙未タ他人ノ探知セサル所ヲ講究セシメ、此學識ヲ擴張シ、以テ公私百般ノ引用ニ供セント欲スルナリ、此目的ヲ達センニ、社ノ内外公私ニ論ナク、各人所藏ノ圖書及ヒ記行探訪録ノ類ヲ集ムルヲ以テ第一着手ト爲ス、此等ノ書類斷簡零紙ト雖モ、諸君ノ寄附又ハ付托アランコトヲ望ム、次テ其足ラサル者並ニ新聞雜誌類ヲ購求ス、而シテ此内ニ求メ得サルノ事ニシテ要用ナル者ハ之ヲ探問スルニ、有志ノ人ヲ勸獎シ、或ハ補助シテ以テ探偵スルヲ務メ、合セテ社員ノ閱覽講究ニ供シ、古今書籍又ハ探訪ニ得ル所ノ最要用ナル者ハ之ヲ講說シ、及ヒ印刷シテ社員ノ報知ニ供シ、併セテ公衆ニ示ス、資金モ亦タ要セサル可カラサル所以ナリ、故ニ社員ニ望ム

所三アリ、曰ク地學ヲ擴張スルナリ、曰ク取りテ用ニ供スルナリ、曰ク之ヲ助成スルナリ、地學ノ用内國ニ在リテハ勸農ナリ勸工ナリ勸商ナリ運輸ナリ政治ナリ防禦ナリ一モ之ニ由ラザルナク、外國ニ向ツテハ航海ナリ通商ナリ攻戰ナリ亦タ之ニ由ラサルナシ、内富強ヲ謀ルベク、外威德ヲ伸フヘク、一モ地學ニ其資ヲ取ラスンハアラス、封建既ニ廢シ郡縣漸ク成リ、況復五州會同四海相通スルノ時ナリ、地學ノ用廣且大ナリト云フ可シ、社員諸君ニ望ム所ハ各々其爲シ得ル所ニ就テ之ヲ勉勵シ、本會ノ益盛大ヲ致シ以テ實用ヲ天下ニ見ンコトヲ

明治十二年四月二十六日

東京地學協會社長

三品勳一等 親 王 能 久 述

## 東京地學協會沿革誌

東京地學協會は明治十二年四月創立せられ、昭和四年四月、閱歷滿五十年に達せり、今其の創立當時の事情を尋ぬるに、

明治十一年春 曾て歐洲を遍歴したる渡邊洪基氏、奧國維納府勅立地學協會の社員となり、地學協會の本邦にも闕くべからざるを痛感し、其の創立を榎本武揚、花房義質の二氏に謀りしに、二氏亦志を同ふし、其學に盡力せんことを約す、偶々曩に英京倫敦に在りて、英國勅立地學協會の社員たりし鍋島直大、長岡護美兩氏の歐洲より還るに會ひ、渡邊氏一日鍋島氏を訪ひて其贊成を得、更に長岡氏の同意もありて、以上の五氏各自朋友に謀り、忽にして同志十數名を得たり

明治十二年二月二十二日 鍋島直大、長岡護美、渡邊洪基、桂太郎、北澤正誠の五氏、首唱者となり、同志十數名上野精養軒に會し、本會設立の趣旨を議し、五氏規則立案の委員に擧げらる、次て鍋島直大、長岡護美の兩氏有志の旨を體し、北白川宮能久親王殿下に謁見、社長に御就任を請ひ奉りて御快諾を賜はる、蓋し當時諸會を會社と稱し、會長を社長と呼びしに因る、已にして規則立

案成るや、

同年三月二十一日 首唱者學習院に會して規則を討議し、東京地學協會設立の議を決定す

同年四月十八日 選舉會を學習院に開き、社長 北白川宮殿下御臨席の下に、副社長二名、榎本武揚、鍋島直大の二氏其選に當り、外に議員十二名、幹事四名、選舉せられ、東京地學協會の陣容甫めて成る、時に會員九十五名なり

同年四月二十六日 第一例會として社員總會を開き、社長 北白川宮殿下本誌卷頭に掲載せる本會創立の主旨を御講演あらせらる

創立の當時事務所を神田區錦町三丁目學習院に置き、毎月定日を設けて例會を開き、社員交々講究經歷なる所を講演し、學習院に書庫を設けて蒐むる文書を閲覽せしめ、別に講演の趣旨、及地學雜報を掲記せる地學協會報告を印行し、社員及一般に之を頒つこととし、經費は主として社員の入社金及年醗金に依り、別に保續資金を募集して之を基金とし、其利子を以て事業資金に充つることとせり

同年九月 瑞典國の汽船フエガ號は、ノルデンシエルド博士統率の北氷洋探險隊を載せて來朝せり、協會は獨逸亞細亞協會及英吉利亞細亞協會と聯合して之を歓迎する事とし、同月十五日同探險



隊一行を工部大學校に迎接し、北氷洋航路發見の學術上の功績を賞揚し、博士に銀牌を贈呈せり、此賞牌は實に協會が贈與せる第一回の賞牌にして、ノルデンシエルド氏は歐亞大陸周航後受けたる最初の賞牌として深く我協會の好意を徳とせる事、其著フエガ號周航紀事に特筆せるによつて明なりとす

同十三年四月二十二日 第一年會を東京師範學校講堂に開く、創立以來毎年約十回の例會を開くの外、毎年四、五月の日を選びて年會を開き、會員に對し毎年度の事業を報告すると共に、豫算及決算を議し、傍ら講演會を開き、又地學上の資料、標本等を陳列し展覽するを例とせり

同年青江秀氏に安南誌の編纂を委托し、又英國海軍士官視察指掌十四編を譯述刊行するに決し、社員柳猶悅、荒井郁之助、桂太郎、品川彌次郎の諸氏に之が擔當を囑託す

明治天皇陛下 本會設立の趣聽し召され、其舉を嘉し給ひ、

同十四年四月十六日 畏くも金壹千圓御下賜あらせらる、是に於て會員有志者亦更に醵金に努めて本會事業發展に資する處あり、又圖書を寄贈する者年々相倍し、歐米諸國の同種學會と交際日に廣く友誼月に厚く、露國地學協會より社長 北白川宮殿下を同會の特貴社員に選奨懇請し來れるあり、又同時に副社長榎本武揚氏同會の會員となり、又維納地學協會は幹事渡邊洪基氏を名譽會員に

選べる等の事あり、本會は創立の當初より歐米諸國の地學會に對し遜色なき一大學會となり、爾來海外の學會にて本會と出版物の交換をするもの八十有餘を算するに至れり

同十四年 協會報告第一號より表紙の裏面に英文を以て標題を掲載することゝす

同年十月十二日 議員會に於て本會報告第一卷及第二卷の二冊を 聖上陛下に獻納する事を議決す

同十五年一月 有栖川宮熾仁親王殿下 伏見宮貞愛親王殿下御入會あらせらる

同年 加奈陀クエベック地學協會は我社長 北白川宮殿下を其名譽會員に選奨し奉り、同年ウエニス萬國地理公會は曩に本會より報告書を出品せしに對し其會長より第五級第一等マンシヨン、オノラブル褒賞狀を寄せたり

同年八月二十四日 議員會の決議に因り、京橋區西紺屋町十九番地の土地及煉瓦家屋を購入し修築を加へ、

同年十二月二十四日 會場並に事務所を此處に移轉す

同十六年三月 贈正四位伊能忠敬翁紀功の碑を芝大木戸に建設することを議決す

同年五月二十六日 西紺屋町の新館に於て始めて年會を開く、之を第四年會とす、此會に於て議

員の決を経て規則を變更し、社長を會長、副社長を副會長と改稱す

同十七年 小松宮彰仁親王殿下御入會あらせらる

同十八年五月七日 第六年會を上野公園精養軒に開く、同會報告に依れば明治十三年以來募集中の保續資金事務を完結し、資金貳萬六千八百餘圓を得、是より會報數地家屋買収及營繕費六千餘圓を支出し殘高約金貳萬圓なり

同十九年十一月 有栖川宮威仁親王殿下を本會の名譽會員に推薦し奉る

同二十年六月三十日 故伊能忠敬翁の爲め測地遺功表を芝公園圓山に建つる願書を東京府に提出し、同八月十八日聞届けらる

同二十一年五月二十四日 小石川區帝國大學植物園に於て本會十年記祝祭を開く

同二十二年四月 會館改築に着手し、改築落成迄事務所を芝公園地第九十八號へ移轉す

同年十二月十四日 本會に於て建設中の贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表落成に付 會長宮殿下御臨席の下に去帟式を舉行し、且會館改築落成祝を兼ね、本館に於て祝賀會を催す

從來協會に功勞ありて賞牌を贈與せられたる者渡邊洪基氏を始め桂太郎、塚本明毅等の諸氏あり

しが、

同二十三年九月三十日 議員會の決議により銅製賞牌の制を創め、之を前幹事赤松則良、大島奎介の兩氏に贈與し、又

同二十四年一月 會長北白川宮能久親王殿下に奉呈して鴻恩を謝し、副會長鍋島直大、榎本武揚會員井上馨、大隈重信、佐野常民、花房義質、長岡護美、北澤正誠、曾我祐準、抑猶悅、伊達宗城澁澤榮一の諸氏にも亦之を贈與して其勳功を表彰せり

同二十四年四月 委員六名荒井郁之助、北澤正誠、志賀重昂、末延道成、田邊朔郎、奈良原繁を選定し、ニカラガ運河開鑿事業報告委員會を設置し、此事業に關する内外報文の蒐集に當らしめ、且つ之が成否の評論利害の詮考に従はしめたるに、同委員會はニカラガ運河開鑿事業取調書一篇を編述し、兼ねて意見を附して報告せり

是より先明治十二年頃より東京大學理學部並に農商務省地質調査所に關係ある諸氏の設立せる地學會なる團體ありて、地學及之に關係ある學科を攻究するを目的とし、時々會合して報告、講演及討論を試み、同十九年一月農商務省地質局にて第一例會を開きてより、毎月例會を開く事とし、且つ其攻究、經歷する所を地學會誌なる小冊子に録して會員に頒ち來りしが、同二十一年十一月の例會に於て、小藤文次郎氏の動議に基き從來の地學會誌（明治十九年第一輯第一卷、第二卷、明治二十年第二輯第一卷、第二卷）を改めて月刊地學雜誌を發行し、之を廣く世上に頒布して、地學の普

及を圖ることゝなれり、即ち地學雜誌は明治二十二年一月より發賣せられ、創刊當時より本邦學界に儼然として重きをなし、明治二十二年二月十六日農商務省地質局より地學會に對し、地質及土性に關する本局の録事は爾今其會に於て發行する地學雜誌に地質局録事なる一欄を設けて掲載するの儀を囑託すとの指令に接せり

同二十五年十二月 目的を同うせる東京地學協會及地學會の兩會合同の議起り、地學協會は十二月十三日合同の件に就き議員會を開き、花房義質、北澤正誠兩氏を協議委員に選定し、十二月二十一日同委員外三氏は地學會協議委員和田維四郎及横山又次郎代理鈴木敏の二氏と臨時協議會を開きて相諮り、規則變更の草案を起し、十二月二十五日東京地學協會は臨時總集會を開き、同會員及地學會員多數出席し、全員の承諾を得て、合同茲に成立し、舊地學會員にして改めて東京地學協會々員に列したる者は三十人にして、是等の諸氏は舊地學會記念の爲め、別に社交的團體として地學俱樂部なる會合を遺存することゝなれり

地學會を合同したる東京地學協會は從來毎年十回の例會毎に（明治二十二年より毎年四回）刊行會員に頒ちたる地學協會報告と共に地學會の發行せる地學雜誌を繼承發行することゝなり、報告、雜誌及臨時刊行書は之を會員及出版物交換の約ある各學會に頒布し、地學雜誌のみ廣く發賣するこ

と、なせり

同年二月 郡司成忠氏近日千島占守島へ移任に付、同島に關する地學的調査殊に氣象上の報告を  
依囑す

同年六月六日 會員三浦宗次郎氏は官命に依り吾妻山噴火調査の爲め、西山氏等と共に登山せしが、不慮の爆裂起り、兩氏遭難職に殉じたり、協會は之を弔して祭祀料を贈り、其功績を表彰する所あると共に、會員横山又次郎に囑し、破裂後の實況を踏査せしめたり

同年六月二十九日 會員福島安正氏は亞細亞大陸を單騎旅行し、地學協會に投ぜられたる其旅行記は、地學上裨益する所多大なるを以て、銀製記念章を贈り其偉功を旌表す

同年七月十三日 帝國ホテルに於て第十四年會開催に付、北京より歸朝せられたる支那公使大鳥奎介及單騎シベリア横斷歸朝せられたる福島安正兩氏を招待歡迎の宴を張る

同年十月二十四日 議員會に於て故間宮林藏翁に贈位の儀を宮内大臣に稟請することを決議す、蓋し本年は同翁の五十年忌に際し、文化年中我邦人の未だ北疆の事情に留意せざるの時に方り、翁の單身樺太に航して韃靼海峽を起え、黒龍江を遡りて滿洲の地に入り、其地理を明らかにして是を邦人に傳へたる功績顯著なるを以てなり

同二十七年六月 西和田久學氏を鹿兒島縣下種子島及屋久島に派遣し、地理、地質、礦物、動植物、生産、氣候等を調査せしむ

日清戰役に際しては、同二十七年七月、朝鮮全圖を編輯印行し、會員に頒つの外之を世上に發賣し、同二十八年會員神保小虎氏に囑して遼東半島の地理、地質及博物學的調査をなし、同二十九年北支那三省地圖並に理學士小川琢治氏著臺灣諸島誌、山吉盛儀氏編臺灣諸島地圖を印行發賣せしが、此間阿部敬介氏著北氷洋及ソラスカ沿海見聞録をも亦出版せり

同二十八年六月 倫敦皇立地學協會よりの申出に基き、同地にて開催せられるべき第六回萬國地理學會議へ水路部及地質調査所出版の地圖書籍と共に本會出版物を出品す

臺灣御出征中の會長 北白川宮能久親王殿下御不幸にも臺南に於て熱病に罹らせられ、

同二十八年十一月六日 薨去あらせられたり、協會は哀悼仰慕措く能はず、謹で弔詞を奉呈し、御葬儀の節は御紳を供へ、哀悼の誠意を表し奉りたり

同年十二月 閑院宮載仁親王殿下 協會の請を容れ給ひ、會長たるを御承認あらせらる、是に於て協會は再び天日を仰ぎ、復た乾坤を觀るの感あり

同二十九年一月二十八日の例會に新會長 閑院宮殿下台臨、親しく令詞を賜はる、爾來會長殿下

の御威徳に依り事業倍々進捗の氣運に向ふ、是れ獨り我地學界の幸慶のみに非ず、國家の爲め吾人一片欣抔の情に勝ゆる能はざる所なり

同年四月二十六日 第十七年會を本會々館に開く、此日會長 閑院宮載仁親王殿下並に 北白川宮成久王殿下御臨席あらせられ、故會長 北白川宮能久親王殿下の追弔式を舉行す

同三十年六月二十二日 議員會を開き、從來會員に限り頒ちたる東京地學協會報告は第十八年第四號（明治三十年一月—三月）號限り廢刊し、爾後本會の報告演說等は一切協會發刊の地學雜誌に掲出することを決議す、即ち明治三十年四月以降協會の講演は勿論、協會に關する記事は凡て地學雜誌に掲載することゝなれり

同三十年より三十一年に亙り、地學上の探檢を依囑したるものに鳥居龍藏氏の紅頭嶼、佐藤傳藏氏の津輕半島の鑿穴の調査あり、又資を足して報効義會事業報告の出版を速成せしめたり

同三十二年二月 南洋方面調査の爲め出發せらるる前島八十六氏に對し同方面の地學的調査を囑託す

同年五月十四日 本會創立第二十年大會を開き、地學に關する圖書、模型等を陳列して展覽に供す、蓋し毎年總會に於て従前の如く講演ある外、地學上の參考品を陳列展覽するを例となすの始なり



り。

同年六月 第七回萬國地理學會議より名譽副會長として、會長殿下を推薦し奉る旨の通知に對し、副會長榎本武揚氏代りて同名譽副會長たるを承諾す、又此年石井八萬次郎氏に朝鮮の地形、地質、産業の調査を囑託す

東京地學協會を社團法人とするの議起り、

同年十二月九日 臨時總會を開き定款草案を議了す

同三十三年 巴里萬國博覽會開催に付、協會の刊行物一切と共に會員田中阿歌麿氏新著「フィジカル・アトラス及會員鳥居龍藏氏編臺灣種族の寫眞帳」を出品することとし、三月二日之を發送す

同年三月六日 中央太平洋學術探險船「アルバトロス」號横濱に入港す、因て本協會は東京動物學會と聯合し、三月九日探險隊長「アレクサンダー」、アガシー博士を帝國大學に招聘し、珊瑚島探檢實歴談の講演を乞ひ、本會よりは銅牌を贈りて學術上の功勞を表彰し、且同氏を本會名譽會員に推薦したり

同年四月二十二日 小石川植物園にて開きたる第二十二年總會に於ては、講演の外一昨年初めて催したる展覧會の繼續として、第三回地學展覧會を開き、會員諸氏は元より學會、官署、學校等よ

り三千五百七十八點の出品あり、之を一般の縦覧に供せり

同年四月二十八、九兩日に互り、遠足會を東京府下青梅地方に催す、神保小虎、八木獎三郎氏指導者となりて地學的又は人類學的の解説をなし、來會者數十名あり、是れ後年地學智識普及を目的として年々協會が催せる學術見學旅行の始なり

同年十一月二十一日 文部省より地學の研究獎を目的とする公益學術法人たることを許可せられたるを以て、從來會長として奉戴したる 閑院宮載仁親王殿下を總裁として仰ぎ奉り、理事として子爵榎本武揚氏會長に選舉せられ、外に理事五人内二人は副會長、三人は主幹、別に監事二人、評議員十八人、名譽評議員七名選舉せられ、協會の組織全く改革せられたり。

同三十四年四月 遠足會を箱根地方に催す。

同年五月二十四日 本會創立以來會務に盡瘁せられたる副會長渡邊洪基氏薨去せらる。

同年八月一日より二十一日に至る三週間芝公園地内正則中學校内に於て東京地學協會第一回講習會を開く、聽講者定員百名を超過し、特に定員外として加入せし者十六名に及びたる盛況を呈し、終了後會員は二組に分れ、或は秩父地方に或は富士方面に實地巡檢旅行を試みたり

同年十月二十七日 臨時總會を會館に開き、故會長 北白川宮能久親王殿下を祭り奉る臺灣神社

鎮座式遙拜式を舉行し、兼て地學講演會を開く

同三十五年三月四日 華族諸公並子弟諸子の爲に臨時講演會を華族會館に開く

同年四月 伊豆大島に遠足會を開く

同三十六年六月二十五日 午前四時會館倉庫と隣家建築學會の間より發火し、倉庫及建築學會共に半燒にて、同五時鎮火せるも、地學雜誌二萬千六百部、地學協會報告一萬四千部、其他北支那三省地圖、朝鮮全圖、アラスカ沿海見聞録、伊豆大島火山記等數百部燒失せり、報告、雜誌等は本會文庫に一二部宛を殘せしのみにて全滅したるは遺憾なり、唯本館は類燒を免れ、文庫及事務所共に無難なりしは不幸中の幸なり

同年七月二十五日より八月五日迄 地學講習會並に遠足會を岩代國猪苗代町に開く

同年十月十六日 評議員會を開き、第八回萬國地理學會議より協會代表者を加盟せしめられ度旨の通牒に對し、會長榎本子爵の名義を以て加盟申込に決す

同年十月二十一日 巴里萬國博覽會より本會の出品に對し贈られたる銀牌到着す

同三十七年一月 ルーマニア地學協會より其創立二十五年祭典記念銅牌を贈與せられる

同年四月二十四日 第二十五年總會を開き席上贈正五位間宮林藏翁贈位奉告式を舉行す、蓋し曩

に明治二十六年十月本會議員會の決議を以て故翁に對し贈位を出願したりしが、本年四月二十二日特旨を以て位階追贈の御沙汰ありたるを以てなり、而して式場には翁の遺物、自筆の樺太地圖、書簡、測量用器等を陳列して展覽に供し、同年七月の地學雜誌は全部之を同翁の事蹟掲載に充て、間宮號として發行せり

同年六月十二日 總裁閑院宮殿下近日戰地へ御出向に付、特に會長を召されて令旨を賜はる、仍ち七月十日會長榎本子爵參候奉送辭を奉呈し無事御凱旋を禱り奉りたり

同年八月十七日 總裁宮殿下戰地へ向け御出發あらせらる

同年九月 ワシントン府に於て第八回萬國地理學會議開催に付本會代表として會員日置益君を列席せしめ、會員小川琢治氏著本邦ニ於ケル地理學知識ノ發達と題する論文一編を提出す。

同三十八年四月 總裁宮殿下戰地より御凱旋あらせらる

同年五月二十日 總裁閑院宮殿下には前月退任したる舊主幹神保小虎、小川琢治、田中阿歌麿三氏の爲に特に賜饌會御開催、同三氏の外、會長、副會長、名譽評議員、新主幹等を召され、舊主幹に對し、慰勞の御言葉を賜りたり

同年五月二十二日 前主幹神保小虎、小川琢治、田中阿歌麿三氏に對し、各多年の功績を表彰す

るため、本會所定の賞牌を贈呈す

同年六月 硫黄島附近に於ける海底火山噴火狀況取調を會員佐藤傳藏氏に囑託す

同年七月より會員小川琢治氏を主任とし、大塚武松にも依囑し、寛政年間親しく樺太に渡航或は北海道千島を調査して功績ありし故最上徳内氏の事蹟調査に従事し、更に最上氏の生地たる山形縣、並に第二の故郷たる青森縣に小林房太郎氏を派遣し調査せしむる所あり

同三十九年五月十二日 第二十七年總會に於て、殊に新領地樺太島に關する物品、圖書等の參考資料を陳列し、衆庶の縦覽に供す

同年八月二日より十六日迄 沖繩縣那覇に於て地學講習會を開催す、蓋し僻遠の地にも地學知識普及の目的を達せんが爲なり

此年第九回萬國地理學會議準備事務局より會長榎本武揚氏を同會名譽副會長に推薦し來る

同年十一月 伏見宮博恭王殿下 東伏見宮依仁親王殿下 山階宮菊麿王殿下 本會名譽會員たるの御承諾を賜はる

同四十年一月より十二月に互り、地學に關する學術講演會を開くこと二十四回にして、毎回數百名の聽講を許し、又五月五日には秩父地方に學術指導旅行を舉行せり

同年五月二十六日 開催したる第二十八回總會に於て、朝鮮に關する圖書物品を陳列して展覽に供す、同年樺太巡檢旅行を舉行し、亦地學論叢の發刊に着手す

同四十一年四月三日 静岡市教育會の贊助を得、同市物産陳列館に於て地學講演會を開く。

同年五月 會員横山又次郎氏に、協會を代表し第九回萬國地理學會議に參列の件を囑託す

中央亞細亞を探檢後來朝したる瑞典の地學者スフェン、ヘデイン博士歡迎の爲め、

同年十月十四日 本會々館に接迎式を舉行して歡迎の辭を述べ、名譽會員に推し、賞牌を贈呈して其偉業を表彰し、且つ帝國大學、早稻田大學、青年會館等に聘して、博士の中央亞細亞探檢談を聞き、更に氏の事蹟を蒐録して一卷となし、特に地學論叢第四輯を以て博士記念號とし、之を刊行せり

同年十月二十七日 會長子爵榎本武揚氏薨去せらる

此年樺太地誌、樺太地質概察圖並に韓國地質鑛産圖を編輯刊行す

同四十二年三月 伯林大學教授アルブレヒト、ペンク博士來朝するや、本會は三月二十日東京帝國大學法科教室に同博士を招請し、「氣候と地形」なる題下講演會を催し、多數の聽講者あり、右終りて上野精養軒に宴し、同博士を名譽會員に推薦し、記念章を贈呈せり

同年五月九日 本會館に於て第三十年總會を開き、席上侯爵鍋島直大氏を會長に選舉す

同年六月 會員荒井郁之助氏が永く議員又は監事の職にあり、其功多きを記念する爲め銀杯を贈呈し、又、七月十一日會員志賀重昂氏催の間宮林藏東韃行一百年祭には會長告文を朗讀せり

同四十三年三月 評議員志賀重昂氏軍鑑生駒に便乘南米へ渡航に付、協會の爲め同地方の地學的調査を囑託す、外に明治四十三年度の事業としては主幹井上禧之助氏官命に因り第十一回萬國地質學會議へ出席に付、協會代表をも兼ねることを依囑、白根鐵甲氏等五氏には地理學的調査、會員大森房吉、佐藤傳藏の兩氏には噴火せる有珠火山の調査會員小川琢治、濱田耕作其他の數氏に清國地理調査を夫々囑託したり

同年五月八日 第三十一年總會に於て評議員を増加して二十五名とするの議を決す、

本會は從來屢々探檢旅行を獎勵誘掖し、地學上の新智識を蒐集普及するに努めたりしが、國運の進歩發展に伴ひ東亞大陸の形勢を實査するの緊要なるを感じ、殊に支那の疆域は本邦と密爾し、我文物古來其影響を被れる所多きを以て、之を詳査して浩瀚なる支那古典漢籍以外、近世の科學的解説を加えむとの計畫を建て、

同年九月十四日 支那地理地質調査に關し、本會より會員石井八万次郎氏を特派するに決し、同

氏は同年末上海に着し、先づ揚子江流域を旅行して翌年四月歸朝せり

同四十四年八月三日より本會主催にて有珠火山學術實檢旅行を舉行し、會員佐藤傳藏氏を指導者として派遣せり

同年八月八日 北海道函館圖書館主催の「ブラキストーン」氏二十年祭には佐藤傳藏氏を列席せしめ、講演する所あり、同八月八日より開かれたる信濃山岳研究會の講演會には會員西村萬壽氏に依囑して講演せしめたり

同年十月二十三日 本會々館に於て幕末の探檢家、故長久保赤水、古川古松軒、最上徳内、近藤重藏、四氏の贈位記念講演會を開き、四氏の遺物を陳列して公衆の觀覽に供す

此年支那調査の爲再び石井八万次郎氏を派遣し、又評議員伊木當藏氏に蘭領東印度及緬甸の調査を、陸軍歩兵少佐高田豐樹氏に南支那の地理學上の調査を囑託す

同四十五年五月 支那調査特派員石井八万次郎氏歸京す

大正元年八月十四日より小笠原島方面に學術旅行を開催し、參加者七十二名あり、會員理學博士小川琢治氏指導者となり、八丈島、鳥島、小笠原諸島、硫黃島等を巡歴せり

同年八月、地質調査所より支那に派遣せられたる野田勢次郎、飯塚昇の兩氏に南支那浙江省湖北



省等の調査を囑託す

同二年七月二十九日より評議員佐藤傳藏氏指導の下に朝鮮及浦鹽斯德方面に學術旅行を催す

同年九月 揚子江流域と題する一書を發行す、本書は在來の調査材料と石井八万次郎氏踏査の結果とに據りて同氏の編纂に成れるものにして、之を 天皇、皇后兩陛下、總裁宮殿下外各宮家に獻納したり

支那の地學調査に對しては更に遠大の計畫を樹て、内外朝野の有志より醸資を得、再び野田勢次郎、飯塚昇兩氏を派遣することに決し、兩氏は同二年十一月出發、翌年七月に至る九箇月間湖南、廣東、廣西、江西の四省を踏査したり

同三年一月 第十四回萬國地理學會議の議決により、古代地圖再製のため、極東委員として本會々員小川琢治氏指名せられたり

同年九月 本會は 北白川宮成久王殿下、竹田宮恒久王殿下、梨本宮守正王殿下、久邇宮邦彥王殿下、東久邇宮稔彥王殿下、朝香宮鳩彦王殿下を名譽會員に推戴し奉るの光榮を得たり

同年十月より支那調査の爲め復た野田勢次郎、飯塚昇兩氏を特派し、兩氏は翌年六月に至る八箇月間に福建、江西、湖南、湖北、安徽、浙江の六省を踏査したり

此頃地學専門の士にして支那に遊ぶもの數名あり、本會は是等諸氏に地學的調査並に資料蒐集を依囑し、支那調査の完璧を期したり、即ち大正三年以降山根新次、川井甲吉二氏に南支那南東部、福地信世、杉本五十鈴兩氏に湖南省、小林儀一郎、堀内米雄の兩氏に四川、陝西、山西三省の調査を依囑し、大正元年以來野田氏其他の囑託員が採集したる化石の鑑定は之を會員矢部長克博士に依頼し、同博士は早坂一郎博士と共に之が研究に従事せられたり

同年十一月 英和對譯地學字彙初版を發行す、本書は佐藤傳藏、井上禧之助外二十一氏の編纂に係り、地學術語統一上效果多きを信ず

同四年八月三日より同十四日に互り九州に地學旅行を催し、加藤武夫氏指導の下に櫻島、阿蘇二火山、三池炭礦及築港、別府、耶馬溪、八幡製鐵所等を巡見せり

同五年三月二十五日 地學字彙訂正再版を發行す

同年八月 會員理學博士神保小虎氏指導の下に秩父地方に地學旅行を催す

同年十月より會館の修繕及増築に着手し、翌六年二月竣工す

同六年二月二十五日 増築新に成れる本會々館に於て臨時總會を開き、支那地學調査事業に関する報告あり、南支那及中支那地學調査の結果に關する講演ありたる外、調査の際採集せる標本を陳

列し、是等は之を三月五日まで公衆一般の縦覧に供し、同年中右調査の結果に據れる「中支那及南支那」を發刊し、更に支那地學調査報告第一卷及第二卷並附圖第一帙を出版頒布したり

如斯支那の地學調査は主として主幹井上禧之助氏畫策努力の結果第一次の南支那及中支那の調査は殆んど完結したるも、北支那方面の調査は特に調査員を派遣することなく、當時此地方に巡遊する本邦地學者多數ありしにより、其都度是等人士に調査報告を依囑したり、即ち大正五、六年滿蒙に旅行したる山根新次氏、岡村要藏氏、片山量平氏、同七年北支那に旅行したる門倉三能氏、山根新次氏等に又同八年北樺太西比利亞方面に旅行したる小林儀一郎氏外四名、佐川榮次郎氏外三十名に地學調査を囑託したるものはこれにして、他日北支那地質圖を輯製する基礎を成せり

同年七月九日 本會創立以來の功勞者副會長子爵花房義質氏薨去せらる

同七年八月五日六日兩日名古屋市に於て學術講演會を開き、次で同十一日迄同縣下に於て學術旅行を催す

同八年十二月一日 地學字彙の訂正三版を發行す

同十年五月十四日 第四十二年總會に於ては講演の外特に地理學古書、古代地圖を陳列して縦覧に供す。

同年六月十八日 本會創立以來の功勞者會長侯爵鍋島直大氏薨去せらる

同年十月十五日 總裁宮殿下御歸朝奉祝晚餐會を開く。蓋し、殿下は曩に 東宮殿下に御隨伴、歐洲御巡遊中の處、無事御歸朝あらせられたるを以てなり

此年支那地學調查報告第三卷及附圖第二帙並化石圖譜の印刷を了し、先年來施行中の支那に關する地學的調査茲に一段落を告げたるを以て、十一月該報告書並に附圖各一部づゝ取揃へ、之を 天皇陛下 皇后陛下 皇太子殿下に献納したり

同十一年三月二十四日 宮内省より左の恩命に接す

東京地學協會

其會創立以來事業ノ狀況ヲ被 聞食 思召ヲ以テ金千圓下賜候事

大正十一年三月二十四日

宮 内 省

同年五月十三日 第四十三年總會に於て侯爵徳川頼倫氏本會々長に當選し、總會終了後引續き御下賜金拜受及第一回海外調査終了祝賀會を開く

同年六月八日 總裁宮殿下は會長以下役員並に支那地學調査に従事したる諸員に對し、慰勞の御思召を以て宮邸に於て饌を賜はる

同年七月十日 平和記念東京博覽會褒賞授與式に於て、支那地學調查報告其他の出品に對し、名譽大賞牌を授けらる

同年八月十五日より二十四日に亙る十日間大分縣別府、耶馬溪地方に於て學術旅行を催す

同十二年五月六日 第四十四年總會に於て本會編纂に成れる北支那地形圖及地質圖の新版並に西比利亞地形圖の原圖を陳列觀覽に供す

同年八月十四日より十一日間山口縣下に於て學術旅行並に講演會を催す

同年九月一日 關東地方に襲來せる大地震に際し、本會の會館亦火災に罹り、建物及圖書全部烏有に歸したり、本會は沿革古く内外の得易からざる浩翰の圖書並に東亞大陸調査に因る豊富なる資料等を所藏したりしに、今遽に之を失ひたるは、獨り本會の恨事たるに止らざるなり、協會は罹災後直に芝區白金今里町九十六番地主幹井上禧之助氏方へ立退き、臨時出張所として會務を執りたるも、印刷所焼失のため、九、十の兩月地學雜誌を發行すること能はざりき

同年十一月十五日 九、十、十一、三ヶ月分合併の地學雜誌を發行す

同十三年五月二十日 會長侯爵徳川頼倫氏薨去せらる

同年八月十三日より十九日迄 北海道石狩、膽振地方に地學講習旅行を催す

同十四年四月 會員東京帝國大學教授加藤武夫氏カイロ市に於て開催の萬國地理學會議へ出席に付き本會代表を兼ねる事を依囑す

同年八月六日より七日間 學術講演會及旅行を長崎、島原、佐世保方面に舉行す

同年十月一日 地學字彙の訂正四版を發行す

同十五年五月一日 華族會館に於て第四十七年總會を開き、席上侯爵細川護立氏會長に當選す

同年六月七日 事務所を京橋區木挽町九丁目二十九番地に移轉す

同年八月三日より一週間 神奈川、静岡、山梨三縣下に於て地學講習旅行を催す

同年十月より十一月に互り東京に開かれたる第三回汎太平洋學術會議には、協會出版の二百萬分ノ一南支那地形圖及地質圖、同北支那地形圖及地質圖、二十萬分ノ一及四十萬分ノ一 南支那地形圖及地質圖、支那地學調查報告三卷、並附圖を陳列せり

同年十一月八日 本協會は東京地質學會及日本地理學會と聯合し、第三回汎太平洋學術會議に列席の爲め渡來したる濠洲、加奈陀、支那、佛蘭西、布哇、馬來聯邦、和蘭、蘭領東印度、新西蘭、比島、露西亞、北米合衆國等の地理、地質學者三十二名を招待し、丸の内中央亭に於て午餐會を開き、是等學界知名の士と交歡したり

昭和二年四月九日 東京會館に於て、伊太利の北極飛行探検家ノビレ少將歡迎午餐會を開き、午後二時より商工獎勵館に於て同少將の幻燈及活動寫眞應用北極探検談を聴く、會員の外聴衆二百五十名に達し頗る盛況を極む

同年八月十五日より二十日まで豆南諸島巡歴地學講習會を催す

同三年三月八日 華族會館に於て臨時總會を開き、本會が東京市京橋區西紺屋町十九番地（震災前事務所々在在）に有する土地所有權及之に接續する土地の借地權を賣却し、會館復興基金を作り、依て新に土地を買入れ會館を新築すべきことを議決す

同年五月二十五日 所有土地及借地權を賣却す

同年七月 英京倫敦に開かれたる萬國地理學會議へ本會代表として出席の件を會員内田寛一氏に囑託す

同年八月二十日より一週間 信州上諏訪町諏訪中學校に於て地學講習會を開く

同四年五月十二日 華族會館に於て第五十年總會を開き、席上評議員定員二十五名を三十名に改むる事、及本會に於て地質調査所出版物の出版頒布をなすことを議決す

同年五月 第四回太平洋學術會議の瓜哇に開かるゝや、本會代表として主幹子爵保科正昭氏出席

し、且つ協會編纂の東亞地質圖見本を陳列したるに、參列諸員の注目を惹き、異常の賞讃を博した

5

同年八月一日より九日まで地質調査所内に於て地學講習會を開く

同年九月 本會編纂に係る東亞地質圖印刷完成に付 天皇陛下、秩父宮殿下、高松宮殿下、總裁  
閑院宮殿下、名譽會員伏見宮殿下、同梨本宮殿下、同朝香宮殿下、同東久邇宮殿下に夫々献上した

5

同年九月二十七日 會館敷地として東京市麴町區下二番町四十八番地の土地二百二坪八合四勺を  
購買す

同五年三月十六日 會長以下役員參列會館敷地地鎮祭を舉行し、直に會館（建坪延百三十二坪八  
合）の建築工事に着手す

同年十月十五日 會館新築工事完成す

（昭和五年十月十五日誌）



# 東京地學協會出版物目錄

(書名)

(著者又ハ編輯者)

(發行年)

東京地學協會報告

自第一年.....

自明治十二年

至第十八年.....

至明治二十九年

地學雜誌

自第五集.....

自明治二十六年

至第四十二輯.....

至昭和五年

學海探究之指針.....

水路部

明治二十一年

朝鮮全圖.....

東京地學協會

明治廿七年

北氷洋洲及アラスカ沿海見聞錄.....

阿部敬介

明治廿八年

北支那三省地圖.....

東京地學協會

明治二十九年

臺灣諸島誌.....

小川琢治

明治二十九年

臺灣諸島地圖……………東京地學協會

伊豆大島火山……………東京地學協會

地文學講義錄(地學雜誌附錄)……………

地學論叢第一輯……………

地理學の位置及分類……………山上萬次郎

人……………坪井正五郎

地 と 人……………志賀重昂

地質學の實用……………神保小虎

火成岩の現出狀態……………脇水鐵五郎

第 二 輯……………

氷 河 の 話……………山崎直方

地理學上より見たる本邦の特色……………石川成章

南北アメリカ縦貫鐵道……………奈佐忠行

ギリシヤの國情……………村川堅固

三二

明治二十九年

明治四十年

明治四十年

明治四十一年

化石の話……………横山又次郎  
第三輯……………明治四十一年

日本政治地理一般……………山上萬次郎  
半島と人文……………志賀重昂  
港の盛衰……………石橋五郎  
第四輯……………明治四十二年  
スフエン、フオン、ヘデイン氏小傳

同 氏講演

第五輯……………大正二年

北極に近きスピッツベルゲン島……………井上禧之助  
第六輯……………大正四年

櫻島火山……………大森房吉  
佐藤傳藏  
石川成章

樺太地誌……………東京地學協會  
明治四十一年

樺太地質概察圖	東京地學協會	明治四十一年
韓國地質鑛產圖	井上禧之助	明治四十一年
有珠火山	佐藤傳藏	明治四十四年
揚子江流域	石井八萬次郎	大正二年
地學字彙	東京地學協會	大正三年
同	訂正再版	大正五年
同	三版	大正八年
同	四版	大正十四年
中支那及南支那	野田勢次郎	大正六年
支那地學調查報告	東京地學協會	大正六年
同	第一卷	同
同	第二卷	同
同	第三卷	大正九年
支那調查地形及地質圖	第一帙	大正六年
同	第二帙	大正九年

支那調査化石圖譜……………	東京地學協會	大正九年
東部西比利亞鑛物分布圖……………	同	大正八年
南支那全圖(縮尺二百萬分ノ一)……………	同	大正九年
南支那地質圖(縮尺同)……………	同	同
北支那全圖(縮尺同)……………	同	大正十二年
北支那地質圖(縮尺同)……………	同	同
東亞地質圖(縮尺同)……………	同	昭和四年

昭和五年十月廿五日印刷  
昭和五年十月廿八日發行

(非賣品)

東京府荏原郡目黒町大字中目黒九〇九  
編者兼發行所 加藤省三

東京市神田區錦町三丁目十七番地  
印刷者 白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十七番地  
印刷所 精興社